〈新刊紹介〉

金子金治郎先生著「連歌師兼載伝考」

「中世の文学風土を特徴づけるものに、連歌師と呼ばれる職業的な文学者がいた。鎌倉末期から形成され、底辺から頂上まで、多様でしかも部厚い層をなしていた。彼等の文学活動は、都鄙東西にわたって広く、貴顕市井に交って多面的であった。しかもその生活力は逞しく、文学への傾情は、単なる遊びや職業を越え、時に宗教的でさえあった。もちろん中世以前にはなく、近世の俳諧師はこれを源流とする。この連歌師の典型は、応仁の乱世を契機に完成されるが、われわれの兼載は、先達宗祇と並んで、その代表者であった。乱世の激浪に揉まれながらも、文学一筋に生き抜いた生涯には、すばらしい迫力が溢れ、比較的短い生涯であったせいか、むしろ沃しいまでの光芒を放っている。

本書は、そういう連歌師兼載の生涯を、できるだけ客観的に描こうとしたものである。」（序一ページ）

本書はつぎのように構成されている。

口絵
序
緒言
第一章　出自
第二章　享年
第三章　修学時代
第四章　園塵第一時代
第五章　北野会所奉行
第六章　初度山口下向
第七章　新撰菟玖波集の前後
第八章　関東帰住まで
第九章　晩年
結語
附録　兼載の著書と作品

兼載伝考内容細目

「緒言」では、兼載の人と文学について寸描がなされ、以下の伝記的考察の予備的展望となっている。以下、第一章、第二章で兼載の出自と享年を各種の資料によって考証・推定し、第三章から第九章にかけて、兼載の生涯を順次たどる方法がとられている。

執筆の態度は、金子先生自ら「できるだけ客観的に描こうとした」（序一ページ）と述べておられるように、あくまでも事実にもとづいて、事実によって語らせようとされている。このことについては、「ただ事実によって語らせようとするあまりに、事実の向こうに拡がる意味に説き及ばない憾みは、しばしば残っている。ただしそれには、私見の意味づけよりも、事実を提供して識者の展開に委ねようという、私性来の気持もかなり作用している。」（序一～二ページ）と述べておられる。ここに、とかく恣意的になりやすい伝記的記述をさけて、徹底的に事実につこうとされる実証精神をみることができよう。

たとえば、兼載の出自については、兼載自身が語るものはなにも残っていないので、それを推定するには当然資料を博捜しなければならないわけである。金子先生は、各種の家譜の類にまで及んで、今日考えうるかぎりの推定をされている。

一方、この実証精神が豊かな想像力と鋭い洞察力に支えられていることも見のがすことができない。本書は「伝考」であって、いわゆる伝記とはその類を異にする。しかし、先生の脳裡には、兼載の像が生き生きとうかびあがっていたはずである。わたくしどもは、行間からそれの伝わってくるのを感じざるをえないのである。先生に親しくお教えいただく気持ちで本書を拝読できるのは、このうえもない喜びであり、幸せである。

（昭和37年10月20日、西雲堂桜楓社刊
A5判　二二五ページ　六八〇円）

（大槻和夫）

日本文学教育連盟編

「戦後文学教育研究史」上・下

本書は、戦後十六年間の文学教育の歩みを、主要な論文・実践報告・座談会記録などの全文あるいは部分を編集採録することによ

って再現したものである。ただし、『文学教育の理論と実践』〈児童文学大系6〉（三一書房刊）の採録論文とは重複することのないよう配慮されている。

目次の柱は次のようになっている。

上

Ⅰ文学における教育性と文学教育
Ⅱ文学鑑賞の心理と文学教育
Ⅲ国語科（言語）教育と文学教育
Ⅳ文学教育の目標と内容(1)
——文学教育の目的を明らかにするために——
Ⅴ文学教育の目標と内容(2)
——芸術教育としての文学教育の確立をめざして——
Ⅵ文学教育運動の現状と課題
付　戦後文学教育関係文献解題

下

Ⅰ児童読物・文学と文学教育
Ⅱ文学教育における教材の選択と配列
Ⅲ文学教材の見かた・考えかた
Ⅳ文学の学習指導の構想
Ⅴ文学の学習指導の展開
付　戦後文学教育運動年表
最近の文学教育文献目録

ぜんたいをとおして読んで、次の三点には、こんにちの関心の焦点のありかが浮きぼりにされているような気がした。

1　国語科における言語教育と文学教育の分離説と止場統合説が、それぞれの根拠をもって主張されている。

2　児童文学についての歴史的研究・作品研究・創作理論の創造への思索のあとが克明にたどられている。

3　教材としての作品の選択と配列の試案がたくさん集められている。

採録されているものの個々については、次の諸論稿に、とくに目を開かせられる思いがした。上Ⅰ1人間・芸術・教育（竹内好）の文学教育を行なうには、「まず教師自身が創造的でなければならない。つまり芸術家でなければならない。」とする問題提起。Ⅳ8(3)視聴的文学教育への接近（滑川道夫）のテレビラジオを視聴して鑑賞する文学教育の重要性の指摘。下Ⅰ3戦後十年の児童文学運動（関英雄）における、敗戦直後の「赤とんぼ」などの良心的な児童雑誌の果した役割の歴史的位置づけのこころみ。

文学教育の問題点を知り、今後の方向をさぐるための便利な資料集である。

なお、上下巻末にある文献解題・年表・文献目録は、これからの研究と実践のための有益な足がかりとなるであろう。（上　一九六二年八月一五日発行　A5三四七ページ　九八〇円　下　一九六二年一二月一五日発行　A5四二一ページ　一五〇〇円　未来社）

（浜本純逸）

広島市立国泰寺中学校国語科著「作文指導のくふう」

作文指導の研究をつづけてこられた国泰寺中学校の国語科の方々が、広島県の作文指導の研究指定校になったのを機会に、いっそうの考えを練り、くふうをかさねて、実践記録のかたちにまとめられたものである。

○感想文指導の実際（1年）——読書感想文の場合——○意見文指導の実際（2年）——作文カード学習と主題についての討論方式の試み——○思索的な文章指導の実際（3年）など十篇の論稿が寄せられている。

毎日の現場の実践に、ただちに生かされるべきくふうがなされている。

（昭和38年3月15日　B5七〇ページ　非売品　広島市立国泰寺中学校刊行）　（浜本純逸）

故岡本明先生編「カード式高等学校国語事典」

昭和三十三年本学卒業の松永啓介氏（現在、山口県立佐波高校教諭）が協力されて、本書が出版された。本書は、高校国語学習の全分野にわたって、必要な知識を網羅し、一ページに一項目がまとまるように整理したもので、高校生の国語学習をたすけ、記憶しやすいように編集されている。

（昭和38年4月1日　蓬左書房刊、A6判　四八九ページ　二五〇円）